

第7章 交通事故被害者支援の具体例

I. はじめに

この章では、2つの事例を取りあげて支援の流れを検討する。支援は被害状況や被害者自身の状況などによって、さまざまな経過をたどっていき、その場その場に応じて柔軟な対応が望まれる。

ここにあげた対応がすべてではないが、今後、自分が実際に支援の場に立ったときにどうするか、と考えながら読んでいただけたら、と思う。

なお、事例は実際にあった複数の事例をもとに、執筆者が作成した架空のものである。

II. 被害者遺族への対応事例から

1. 危機介入を中心として

●**事故概要**：平成〇年6月1日、バイクで通勤途中の40代男性が、交差点で左折中の自動車に衝突され、亡くなった。

●**家族構成**：被害者、妻（Aさん）、長男（高校生）、長女（中学生）

6月1日	・ 事故発生
6月7日	・ 電話相談 家族の知人という女性から電話が入り、Aさんへの支援を依頼される。 →知人を通じて、支援者の存在を伝え、自宅訪問の了承を得る。
6月13日	・ 支援者2名にて遺族宅を訪問する。 まずはお参りをさせていただき、Aさんからお話をうかがう。Aさんは落ちついている印象。しっかりした様子に見受けられる。 ・ Aさんは次のようなことを語った。 「夫が亡くなったという現実を受け入れられない。葬儀のときはよく憶えていない。警察からも説明を受けたはずだが憶えていない。食事はほとんど取っていないし、睡眠も取れない。これからは自分が家族を支えていかなければいけないのに、どうしたらいいのかわからない」

被害直後には、感覚が麻痺している方が多い。その場合、一見落ち着いてしっかりしているように見えるが、実際には混乱状態で何をどうしたらいいかわからないという状態である。情報提供は繰り返し行い、必要に応じて書面などで連絡を取ることもよい。

今後、起こってくることをあらかじめ知っておくことで、被害者は心の準備を